



# 井 上 靖

現代日本文学館

43

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 43

井上靖

昭和四十一年五月一日第一刷

著者 井上靖

発行者 上林吾郎

発行者 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三  
電話東京(二六五)一二一一

振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

目次

井上靖伝 山本健吉 3

射程 29

獵銃 251

玉碗記 290

満月 307

姨捨 321

敦煌 335

洪水 468

注解 482

|     |                                   |
|-----|-----------------------------------|
| 解 說 | 490                               |
| 年 譜 | 498                               |
| 地 図 | 「敦煌」<br>467                       |
| 挿 画 | 生沢朗「射程」「獵銃」「姨捨」<br>福田豊四郎「敦煌」「玉碗記」 |

井上靖伝

山本健吉

# I

生きている人間はまだ人間の「形」をなしていない、という意味のことを小林秀雄氏が言ったことがある。この逆説は、歴史の真諦（しんてい）をうがっている。人間は棺（はこ）を掩（おほ）うて後、歳月による忘却と追憶との交錯の中から、本当の「形」を現わして来るものらしい。

私はいま、当代の第一線作家として華々しく活躍している井上靖氏の伝記を書くこととして、途方に暮れている。史料は掘り出そうとすれば、限りもなくあるだろう。何よりも伝えられる当人が、生字引として存在する。だが、史料のあまりの豊富さとなまなましきのために、伝記はかえって死んでしまう。伝記が形をなすためには、歳月による忘却と、忘却の中から甦（よみがえ）らせる力としての追憶とが、絶対に必要である。

だから私は、ここでは伝記を書くと言いながら、それは将来伝記としての形をなすであろうところのものの周辺を、さまよい歩くに過ぎないだろう。

# II

井上氏は明治四十年（一九〇七）五月六日、北海道上川郡旭川町に生まれた。父隼雄（はやし）、母八重（やえ）。隼雄氏は第七師団の軍医として、当時旭川に勤務していたのであって、翌年はもう旭川を引上げたのだから、この地の記憶は氏にある

はずもない。

その後父の任地が変わるごとに、静岡、豊橋などを転々としたが、大正二年（一九一三）に氏は父母の膝もとを離れて、郷里伊豆湯ヶ島に帰り、祖母かのと同居することになった。

ここで氏の家系について、簡単に触れておこう。

原籍地は伊豆の田方郡上狩野村大字湯ヶ島字久保田である。今でこそ湯ヶ島と言えば、中伊豆の温泉郷として著名だが、当時は天城山麓（たまけ）の寂しい温泉部落に過ぎなかった。東海道線三島駅から、大仁まで軽便鉄道が通っていて、そこから狩野川沿いに二時間馬車に揺られて行かねばならない。ガスも電燈もなく、氏は小学生時代を通じてランプの燈の下で勉強した。

井上家のある部落久保田は、旧道に沿った十二、三軒の集まりであった。にぎやかな新道沿いの部落宿（しゆく）を過ぎ、溪谷沿いに上ると、西平（にしひら）、新宿（にしゆ）、世古滝（せこたき）といった部落があつて、温泉が湧（わ）き出していた。そこには村の共同湯もある。なお上って行くと、天城の峠（とうげ）に達し、湯ヶ野を経て下田に下る道が通じている。

井上家は代々医であつた。私は氏の文章、ことに『私の自己形成史』を参照しながら、氏の家系について語ろうと思う。

井上家の七代ほど前の祖先は、四国から流れて来て、天城山麓の山村の農家（小説『末裔（まつご）』によれば大場という家）

に草鞋をぬぎ、そのまま医者として村に住みついでしまった。そのとき一代目は二十歳ぐらいで、母親一人を伴っていた。

氏は『初代の四国からやって来た人物が女か金で失敗して逃げて来たものに違いないという親戚の老人たちの見方は、私には我慢のならぬものであった。』（『私の自己形成史』）と書いている。だが一方、『末裔』には、『私は、幼い時、すべての少年がそうであるように、自分の家の先祖の話聞くのが好きだった。飢饉の時農民の暴動を指揮して、幕吏に追われて、到頭この伊豆の山奥に落ちのび、そのまま百姓になってしまったというのが、この田所家（井上家）初代の人物について、部落に昔から伝えられている伝説である。この話は別に書きものに書かれてあったわけではなく、全く口から口へと伝えられて何代目かの私の耳



伊豆天城の林道にて（昭和32年）

まで伝わるに到ったのである。』と書いている。『末裔』の方は小説だから、いくらか潤色があるかも知れない。だが、医者と言ひ百姓と言つても、こんな山村の田舎医者においては、べつに矛盾ではない。氏はこの小説では、田所家に伝わる叛逆的、行動的な血は、田所家から養子に行った奥伊豆の佐和家にそっくり移ってしまつて、田所家では穏やかな学究的な血に擦り変えられてしまつていくことを、言おうとするのである。

井上家の墓石に刻まれた文字によると、玄春、玄達、玄俊といった人物が、それぞれ医を業として、郷里の村で、江戸末期から明治へかけて一生を終えている。『末裔』によれば、玄達は年貢のことで葦山の代官所を襲撃した人物であつた。そしてその家系の中で、玄俊の子である曾祖父の潔が、『僅かに辛うじて私の自尊心を支え得る唯一の人物であつた。』と書いている。

『曾祖父は、初代の軍医総監を勤めた蘭嶋松本順の門下として医学を学び、葦山の江川家のお抱え医者となつたり、静岡県立病院の初代院長をやつたりして、晩年は郷里に引込んで開業し、半島の基部の三島から、半島の突端の下田までも往診に出掛けるといった田舎医者としては一応盛名を馳せた人物であつた。』

『私はこの曾祖父がいかに非凡な努力家であつたかということ、それから彼の師の松本順からいかに信任厚かつたかということなどを、彼の妾であり、私が『おばあさん』と

呼んでいた人物から絶えず吹き込まれて育ったのであった。この老婆との奇妙な共同生活から得たものの中で一番大きいものは、彼女が持っていた当時既に故人になっていた曾祖父潔への尊敬と愛情の中に、私が絶えず置かれていたことであつたかも知れない。》（『私の自己形成史』）

この曾祖父潔は、明治三十年には亡くなつていて、四十年生まれの井上氏は直接その風貌ふうぼうに接することはなかった。だが、潔の存在は氏の心に大きな影を落としていて、それは井上家の家系における唯一の誇るべき人物というだけでなく、人間のバックボーンの大事なことを教えたようである。氏は作家として立つまでのあいだに、しばしば虚無的な気持にもおそわれ、生活崩壊の危機にも立ったはずだが、そのとき氏の支えとなつたものは、曾祖父潔の生き方ではなかったかと思う。そして、その潔やその師の松本順について、忘れることの出来ない印象をききみこんだのは、幼年時代の六年間起居を共にした祖母かの女であつた。

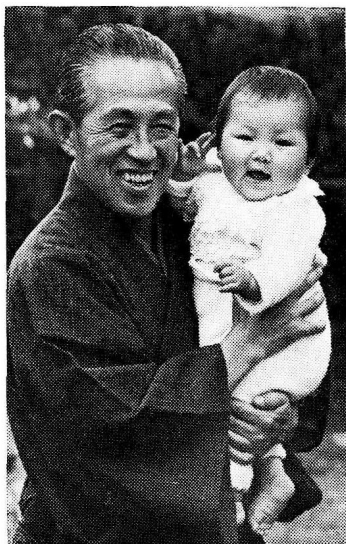
### III

曾祖父は本家からほど近い場所に、本家よりも大きい家屋敷を手に入れて、かのを住まわせ、つねにその新居で起居して、診療の仕事もそちらでやった。本妻にもかのにも子がなく、兄の子文治を養子としたが、彼は医者いしやの業を継がず、雑貨、呉服などの商売をやったこともある。文治、たつ夫妻の八人の子供たちのうち、長女八重は、潔の死後

井上家に入籍したかのの養女として新宅の方に分家を作り、一里ほど離れた門ノ原部落かどはらの石渡家から隼雄はやおを婿に迎え、医の業を継がせた。この隼雄、八重の長男として、井上氏は生まれたのである。

父系の石渡家について簡単に触れると、部落一の旧家で、篤農家と言うべきであつた。自伝的小説『しろばんば』に、氏は父方の祖父秀雄について書いているところがある。狩野川の支流である猫越川ねこがしに沿って遡さかのぼった山中の棚場に小屋を作り、そこで椎茸栽培の研究に打ちこんでいた。合掌式という椎茸のぼた木の並べ方や、木ぼし法という乾燥法を発明し、椎茸を外国へ初めて輸出したのもこの祖父であつた。この祖父の生き方に触れた感動を、氏は小学校の綴つづ方に書いたことがある。

なお父方の伯父盛雄は氏の小学校の校長で、厳きびしく気む



初孫を抱いて（昭和41年）



誕生後5か月（明治40年）

ずかしい校長として少年たちや村人たちからも怖れられ、氏に対する態度もそれと寸毫も変わらなかった点で、特別の印象と懐かしさの思い出とを植えつけられている。

さて、分家の広い母屋は、東京から来て村医をしている医者に貸し、屋敷の裏手の土蔵に、氏はかのと一緒に住んでいた。氏が両親と離れてかのと住むようになったいきさつについては、氏は次のように書いている。

《恐らく当時若かった私の両親は、私の妹が生まれたりして人手が足りなかったので、何かの時、ほんの一時的なつもりで私を祖母の手に預け、そのままずるずるとその状態を長く続かせてしまったものであらうと思う。祖母も恐らく愛情が移って私を手離せなくなったであらうし、私の方もまた祖母になつて、両親の許に帰る氣持を失くしてしまつたのであらうと思う。》

《……祖母は、封建思想でがんにがらめになっている田舎

で、若い時代を医者の子といふ特殊な立場にあつて生き、その後籍まで入るに到つた人物だったので、

氣性の勝つた女性だったらしい。現在一、二枚残っている写真を見ると勝氣そうで、なかなかの美貌の持主でもある。

《村には母方や父方の親戚が何軒もあったが、私はそうした親戚を何となく敵に廻して、幼少時代を孤立無援の祖母との共同生活に於て過したのであった。祖母もやたらに私を可愛がつたし、私もまた何かにつけ彼女のただ一人の味方として忠誠を尽したわけであつた。》（『私の自己形成史』）  
かのは奥伊豆の下田に近い漁港の生まれであるが、少女時代に東京で芸者に出ているとき、潔と知り合つて落籍され、その任地に囲まれていた。潔が四十歳のころ、健康上の理由で郷里へ引込んで開業したとき、湯ヶ島へ始めて公然と第二夫人として姿を現わした。そのとき二十六歳であつた。

彼女は潔に囲われるようになってから、郷里の肉親や親戚縁者のおおかたとは、いっさい關係を断つた。言わば天涯孤獨であり、井上氏の好きな言葉で言えば、「孤猿」の境涯である。『しろばんば』に、彼女は晩年に、意氣も健康も衰えてから、少年の氏を伴つて、出郷以来一度も帰つたことのない郷里を訪ね、新造船の進水式を見るところがある。（小説『蘆』にもこの場景がある。）「故里へ廻る六部は身の弱り」という川柳と同じ心境で、行つてみても、顔見知りの人は一人もなく、声を掛けてくれる人もない。それでも、何かの出現を待っているかのように、うつろな眼を進水式のにぎわいに投げかけている。何か落莫とした

孤独の老境を感じさせる一節で、その悲しみを少年は身にしみて受取ったはずであった。

この老女が存在が、青少年の心に濃い影を投げかけ、彼女によって少年は初めて世間というものの真実に触れ、他人との関係の中に身を置くという経験を持ったのであった。なお引きつづき氏の文章を読んでみよう。

「私は時々、一体この祖母から何を得たろうと考えることがある。恐らく私が祖母から貰った一番大きいものは、その時は勿論意識すべくもなかったが、何の血縁関係もない他人との共同生活から自然に生み出される愛情の中に身を置き、祖母対孫、老女対子供ではあったが、そのお互いが持つ愛情の中に、それぞれ取引の匂いをひそませていたということである。祖母は私を手なずけておくことに依って、多少自分の不安定極まる立場を強固なものにする必要があったし、私は祖母の味方であることに依って、彼女から当然の贈物として大きい愛情を受け取っていたのである。」

「謂ってみれば、私と祖母とはかなり強固な同盟関係にあって、村人や親戚を敵に廻して共同生活をしていたのである。この祖母との同盟は彼女が亡くなってから四十五年程経った現在もなお、私の心の中では破れていないのである。若しこれが肉親間の持つ多分に無償であるべきだとされてある愛情であったなら、とうにもっと他の質のものに変わっていたことであろうと思う。」（『私の自己形成史』）

このおかの婆さんを描ききったということが、自伝小説

『しろばんば』の最大の魅力の一つになっている。彼女の孤独は、大都会における市民社会で、誰しもが味わう孤独とは、類を異にしている。それは狭い部落という、地縁的、族縁的な小社会におけるよそ者の孤立であり、しかも彼女の妾という立場によって、村人たちの軽蔑、憎悪、義望などが混合して作り出した敵対感情のなかで、強く生き抜くことを強いられる。それはほとんど、精神的な村八分と言ってもよい。そしてその孤立は、社会というよりもセケンとかクガイとか言った方が適切な有機的共同体においては、いっそう苦痛なのである。

分家とは言え、氏は井上家の長姉の嫡男であり、それだけに本家や親族からも村人からも、一目置かれる存在であったわけで、おかの婆さんも子供ながらに氏を立てていたのである。その上に、氏はそのような老婆の、たった一つの生きて行く支えとなった。それは、無償の愛情によって支えられたものではなかったがゆえに、いっそう強固で長持ちしたと、氏は言う。寄り添う両者の気持が、切実なのである。少年の気持に、この祖母から大きな愛情を受けたという欲求の外に、祖母を外部の攻撃から守ろうという俠気と勇気とが見られることに、注意しなければならぬ。これも氏の文学の一つの大きな要素——男性的魅力——を考えると、思い起こすべきことがらだろう。

氏が おかの婆さん から得たものは、これだけに止まらない。



(上) 郷里湯ヶ島の家に両親を訪ねた折に 父この年没し、親子三人での最後の写真(昭和34年)(下) 祖母かの(60歳)

《……彼女が私に語ってくれた事で現在に到るも記憶に残っていることは、曾祖父が金離れがよくて金を湯水の如く使ったということ、松本順という人物がいかに立派で、豪い人であったかということであった。おか婆さんは、松本順のことを、先生と言った。彼女が先生と呼ぶのは、この世で松本順一人であった。私の通っていた小学校の校長のことも、彼女は面と向かっても決して先生とは言わなかった。同じ先生という言葉で他を呼ぶことは、松本順

の尊厳を傷つけるとでも思い込んでいる風であった。

《私は子供心に松本順を褒める時の彼女が好きであった。自分が一生を捧げた曾祖父の師であり、彼の最も尊敬する人物であったから、無条件に自分も亦、それを信奉して疑わないといったようなところがあった。私は人を尊敬する態度というものの美しさを、このおかの婆さんから教わったものである。松本順のことを話す彼女の言葉には、いつもそれを通して曾祖父への愛情が滲み出ており、その愛情のはろばろした海を通して、遙かずっと遠くの松本順という絶対を伏し拝むようなところがあった。》(『グッドル氏の手套』)

このことは氏の人間形成に、大きな影響を及ぼしていると思う。もちろんおかの婆さんは、松本順の学問について、何も知っちゃいなかったが、彼をこの世で唯一の先生と仰ぐには、いっこう差支えはなかった。

《私は人間と人間との関係の中で、一番好きなのは師弟の関係である》(『私の自己形成史』)と氏は言っている。氏に取って、それは「師弟の礼」であって、「師弟愛」ではない。愛などという形をなさない、曖昧なものが、そこに介在するのを氏は嫌う。氏には無償の人間関係に対する深い不信がある。そして肉親関係や友人関係、隣人関係にまさって、師弟間のストイックなきびしい関係に、理想的な人間の交わりを見ているのである。その原型は、おそらくおか婆さんに吹き込まれた松本順と井上潔との師弟関係

であつただろう。少年時代の氏が、松本順の人物に対して抱いていた映像は、《豪放磊落》であるが、一点侵すべからざる峻厳さをどこか持っている。色は白く髪は黒く、肥り肉の中背の人物》(『グウドル氏の手套』)である。このような峻厳さの持つさわやかさを、氏は好んだのである。

井上潔は自分の子に対しては、師でありえなかつた。ただし、井上潔と足立文太郎とのあいだに、やはり理想的師弟関係が成立した。足立氏は後に井上氏の岳父となる人だが、湯ヶ島の隣部落市山の出生で、潔の妹すがが足立家に嫁して生んだのである。事情があつて早く両親と別れ、潔の手で育てられ、京都大学医学部教授となり、解剖学の権威であつた。戦争末期に八十一歳で没するまで、家事には一切構わず、寸陰を惜しんでそのライフワークである「日本人動脈系統の研究」に没入した。足立氏は小説『比良のシャクナゲ』の老学徒三池俊太郎のモデルである。この「没入」の姿を、氏は人間の生き方として、もつとも美しいとしている。そしてその美しさは、すぐれた学究においてもつとも純粹に現われる。氏は井上家の家系の中に間歇的に現われるこの一途な学究魂を尊重しているようである。

#### IV

母方の叔母のうち、美しいまち(『しろばんば』のさき)に氏はたいへん惹かれ、なついたようである。天折した彼女の美しさは、少年の氏に結晶作用をもたらし、その思慕

はほとんど初恋と言つてもよかつた。氏が小説に描く美女たちの原型は、彼女のイメージのうちに胚胎しているようである。

氏が小学二年生のとき、彼女は沼津の高等女学校を卒業して、家へ歸つて来た。氏は彼女が村に在ること、何とも氣持が明るくなり、上の家(本家のこと)へ行くのが楽しくなつた。彼女が一人いることで、薔薇の大輪でも活けるやうに、陽の当たらない奥の部屋までが明るく華やかなものに感じられた。氏は何回も上の家へ行き、彼女の傍へまといつていたい氣持があつた。彼女のお伴をする恰好でいつも一緒に西平の湯へ出掛け、彼女に沐浴を洗つてゐた。彼女は氏の行つていた小学校の代用教員になつたが、えび茶の袴を着た彼女が一人加わると、教員室の空氣は、そだけ全く違つた華やかなものになつた。

まちは同僚の小学教師と戀愛して、子供を生み、結核を病んで、上の家の二階で寝ている。氏はおかの婆さんに、上の家の二階に行くことを厳しく止められる。だが、氏は階下に誰もいないのを見すまして、素早く二階へ上り、唐紙の外で「開けて!」と言う。中からは「だめ」と声がかかる。押問答の末、ぱつと細目に唐紙が開いたと思うと、彼女の白い腕が一本飛び出して来て、少年の頭をぽんと軽く叩くと、直ぐまた唐紙は閉められる。それ以後、唐紙を開けようとしても、かたとも動かない。有無を言わさぬ厳しい口調で、内から「歸りなさい!」と言う。このことは氏

に取って、強い印象を与え、後々まで華やかな思い出であった。まちは間もなく死んだ。

これだけ書くと、読者は『射程』の多津子も『氷壁』の美那子も、原型はここにあったのだと感じないだろうか。いや『楼蘭』のミイラとなった美しい后も、『敦煌』のウイグル族の王女も、『蒼い狼』の忽蘭も、それらのイメージの源は少年時代の氏の叔母まちに寄せた思慕にあったのだと、思えないだろうか。少年の憧憬が美しい結晶作用を起して、女性の永遠化された肖像が浮び上る。氏が描き出すヒロインは、男にとって彼女が運命ともなり、破壊ともなるのをいとわなくさせるような、一つの絶対者である。まちに對する少年の氏の心理にも同じような憧憬はすでに芽生えており、それは美しい貴女に仕える騎士のそれ以外ではなかった。

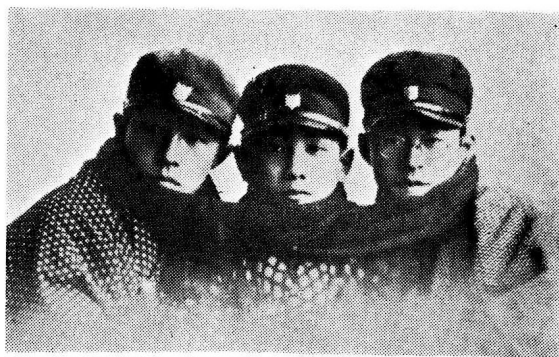
## V

井上家は代々医として、村で四角な文字に親しむ知識人として、敬意を払われていたが、明治になり曾祖父潔の時代になって、その名望は伊豆一円にとどろいていた。駕籠に乗って、湯ヶ島から南端の下田までも出掛けて行った。それが井上家の位置を決定し、その余慶の中に井上家の人たちはあつたわけである。井上家の子弟だけが、村の小学校の祝日には、袴をはいて登校することを、誰もあやしまなかった。

氏の小学生時代、井上家の本家は、沼津藩の家老から二本の薙刀と朱塗の風呂桶とを持って興入れしたと、村人にはやされていた曾祖母ひろを始め、祖父母ならびに八人の叔父叔母たちをかかえた大家族であつた。氏だけがおかの婆さんと二人、この大家族から疎外されて暮らしていたのだ。もっとも、氏は小学六年生の一月までを、父や母から遠く離れて生長したとは言え、それが伸び伸びした環境であつたことに違ひはない。それに、父母に甘える機会がなく育つたということが、たとえ肉親であつても、肉親であることによって曇らされない冷静な客観的な眼で見据えるところの第二の天性を植えたようである。氏は『私の自己形成史』において、父に對しては「苛酷極まりない批判者」であつたし、母に對しても多少その意地悪さを弱めたとしても同様であつたと言っている。父親にも母親にも似ない自分を造り上げようとして努力して来たという。だが結局は、父母の性格を自分のうちに次々に発見して行かなければならなかつたのである。

《私という人間は父から受けた氣の弱さと八方美人的な性格と、母から受け継いだエゴイズムと物に感じ易い神経とを併せ持っており、そして、人生に對する向い方に於ては両親とは全く反對の方向に自分を捻じ曲げてしまったのである。》（『私の自己形成史』）

《私は大体父からはいいところだけを貰っている。氣の弱いところ、人と争うことを好まない性格、勤勉なところ、



沼津中学時代 右端藤井寿雄氏、左端靖(大正11年頃)

悪いことのできぬ  
 小心さ。……これ  
 に反して、私は母  
 からは主として、  
 その欠点を受け継  
 いでいるようであ  
 る。病的なほどの  
 潔癖さ、神経質、  
 妥協のできぬ負  
 けず嫌い、気位の  
 高さ。『母を語  
 る』

私はいま、そう  
 いうことをこまか  
 に分析することは  
 できない。今は、

小学六年生までの七年ほどを、両親と別居して暮らしたこ  
 とから養われた性格的な強さを指摘するだけにとどめる。  
 大正十年四月、氏は父の任地浜松で、県立浜松中学校に  
 入学した。一年浪人した模様であるが、氏の悠々として急  
 がない人生行路は、ここに始まったようである。ただし、  
 このときは首席で入学した。

この中学には、わずか一年しか在学せず、友だちを作る  
 時日もなく、鮮かに記憶に残っていることと言っては、「孤

猿」という俳号を持った花田という厳格な体操教師だけで  
 あった。《猿にも愚劣極まる集団生活が厭になって、仲間  
 から離れて独りで静かにしたいと思う変ったのがいる  
 そういうのがつまり孤猿だ》(『孤猿』)というその教師の  
 説明は、氏に強い印象を与えたのである。

翌年、父は台北衛戍病院長に転動したため、氏は沼津中  
 学校へ転校し、三島町の親戚の家に下宿して通学した。氏  
 の『しろばんば』が小学校時代のことを描いているのに対  
 して、近作『夏草冬濤』は中学生時代の生活を描いている。  
 これは新聞に連載されたのち、まだ単行本になっていない  
 から、今参照の便宜を持っていない。私は随筆『青春放浪』  
 によって簡単に語ろう。

ここで氏はすこぶる自由な少年時代を過ごしたようであ  
 る。気の合った数人の友だちと毎日のように遊んだ。三年  
 になったとき、小学生のころから白秋、三重吉に傾倒して  
 童謡などを作っていた文学青年仲間が落第してきて、井上  
 氏たちに大きな影響を与えた。(磯山正「あの頃の井上君」  
 彼等は総じて早熟であり、氏に怠惰の持つ贅沢な楽しさを  
 教え、また初恋の話などをして青春の情感を氏の心に注ぎ  
 込み、また詩歌、小説を教えてくれた。一人だけ晩生で、  
 文学に無縁な少年であった氏が、このとき始めて「文学と  
 中学生らしい放埒さの、両方の洗礼」を受けただけである。  
 そのころ読んだものは、トルストイや武者小路実篤や倉  
 田百三などの人道主義的な作家が多く、そのころの氏の仲

間は、「白樺」的人道主義を経て、定石通り左傾して行ったもののようである。詩を書いていた藤井寿雄、金井広、短歌をやっていた岐部豪次、松本一三などの名を、氏は挙げた。そのうち藤井氏の

カチリ、

石英の首、

秋。

などという詩を見せられて、なるほど詩とはこういうものかと思ったという。

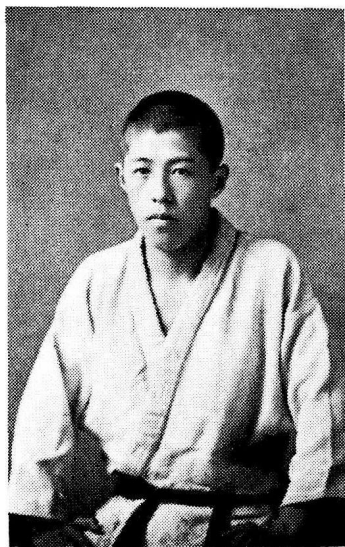
《中学時代の私の仲間はかくして上級学校へ進むと次々に左傾していったが、中学在学中はいずれも学業には怠惰で、そのくせ読書好きな、早熟で、反抗的な少年たちだった。革命歌も啄木（たけふぎ）の歌もごく自然に口から出、学校をさぼったり、たばこをのんだりする程度の少年らしいおさない放埒さに、からだが細くなつて背だけだけが伸びる時代を任せていたのである。》（『青春放浪』）

これらの仲間とつき合うことがなかったら、自分は文学の世界に足を踏み入れることはなかったろう、と氏はしばしば述懐する。その時代の仲間は、現在もいろいろな形で文学や夢を、その血肉の中に溶かしこんでいると言う。この中で、氏だけが当時、文学をやろうとは夢にも思っていなかった。井上家は代々医であり、自分も高等学校は理科を選ぶことを、当然のこととして疑わなかったのである。中学時代の教師には、氏等はおおむね反抗的だったが、

ただ一人、図画と国語の教師前田千寸だけは、何となく気になって頭が上らなかつたという。これも氏の好きな、一つのことに一途に打込んでいる学究であり、戦後そのライフワークとして「日本色彩文化史の研究」という大著が完成し、氏は彼の風貌を小説『黯い潮』の中に描き出した。

一年浪人生活を送って、氏は金沢の四高理科に入学した。たまたま父隼雄氏が金沢へ転任になっていたから四高を選んだのだが、一年ほどでまた弘前へ転任になったので、金沢時代の後半は拘束のない下宿生活に転じた。

だが、この暗鬱（あんうつ）な北国の古い城下町の三か年は、まったくの禁欲的生活であつた。氏は中学四年の時から、柔道の試合に駆り出されていたが、四高では柔道部にはいって、明けても暮れても無声堂という道場で猛稽古をやり、酒、煙草はもとより、一切の遊びをみずから断つた。入部した



沼津中学五年 柔道初段のころ（18歳）

とき先輩部員に言われたことは、「お前ら勉強をしにこの学校へ来たと思うなよ。柔道をやりに来たと思え。学問は大学へ行ってから幾らでもできる」ということだった。氏等は思いきり気前よく、一切の勉強を放擲した。

どうしてあのように柔道に打ち込めたのかと、なかば不思議な思いでそのころが振り返られるのであったが、氏はそれも青春の一つの過ごし方として、十分意義があったという。中途半端な気持でなく、一途に打ち込んだ姿が、思い出しても一抹のさわやかさを感じさせるのであろう。それは氏によれば、「練習量がすべてを決定する柔道を作り出そうとしていた」ことになる。それは体格に恵まれぬ青年たちが試合に勝つための方法であり、氏等によって作り出されたものが、高専柔道特有の寝技であった。練習によって人はどれだけの力を発揮できるか、三年の日時をかけて試したとも言える。氏はそのころ四段を与えられた。

中学時代の野放図な放埒と、高校時代の厳しい規律で縛った生活と、およそ対蹠的な経験だった。だが、三年のときの高専大会が終るとともに、氏等は申し合わせたように思いきりよく柔道と規律的生活とから離れた。柔道部生活から解放されるとともに、氏に中学時代に開かれたうたごころが甦って来たようである。氏は誰にすすめられたわけでもなく、詩を書き出し、当時高岡中学の教師であった大村正次氏が出していた詩誌「日本海詩人」に載せて貰った。氏の書いたものが活字になった始末である。

勉強を放擲していた氏は、理科に籍を置いていたにもかかわらず、大学は医学部はもとより、理学部系の学科への志望を棄てなければならなかった。これは父隼雄氏はもとより、井上家の期待にそむくことでもあった。後に私は、隼雄氏から、自分に先見の明がなくて、自分の思い通りのコースを歩ませようとして、靖にえらく廻り道をさせた、という述懐を聞いたことがある。だが、それは氏が異常な作家的成功を収めてからの結果論である。むしろ、息子子の自由放埒を許し、異常に長かった学生生活をしたいがままにさせていたことで、その才能の開華に手を貸していた、とも言えるだろう。

この寛容はどこから来るのか。私の臆測では、隼雄氏もまた望まずして医者になったのではなかったかと思う。他家から井上家に入った者として、医者になることを心弱く甘受したのではなからうか。隼雄氏は退任して郷里へ引込んでからは、二度と聴診器を取ろうとはせず、後半生を故山にことさら埋没させてしまったのである。

家の期待するところを、そのまま自分の志望として疑わなかった氏は、このとき氏自身の選択によって、志望を決定しなければならなかった。もちろんそれは、高校卒業期になって突然その決定を迫られたというのではない。中学時代の放埒と言ひ、高校時代の柔道部生活と言ひ、医者という、外部から決められた自分の運命への暗黙の反抗が、それを氏にさせたのかも知れない。